

毎月十日廿五日發行

家庭雑誌

壹冊定價金五錢

明治二十九年十一月十日發兌

第八拾九號

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

柴四朗君、德富猪一郎君序

朝鮮王國

菊池謙讓著

四六版大凡六百頁

定價五十錢

郵稅八錢

目錄要領

●總論●地理部●白頭山系○白頭の背系、白頭の西南系●六大江●中原●三南●附錄●社會部●社會の階落○王室、貴族、常民、奴隷、都城、村落●佛教●儒教●社會情態●政治制度●歷史部●七朝史概要●近世史○大院君時代（上、下）外戚と大院君、十七年の變、天津條約、東方の瀋屛、東方二帝國、獨立扶植、（上、下）十月八日、廿八日事件、十一日の變と日露協定、東亞に於ける朝鮮、以上

○日本新聞評　朝鮮實に是れ我邦人の忘れんと欲するも忘る可からざるの國たり、しかも其伊藤内閣が朝鮮に於ける蹉跌は爾來又前日の意氣を見ず我人心失望の結果は漸く此考究問題を抛棄し去らんとして徒らに彼我人の跳梁に一任するに至るの風となれり豈慨す可きの事ならずや、長風菊池謙讓君は久しく彼地に在つて其事情に通ぜるの士、曾つて十月八日事變を以て獄に繋がれしは世人の知る所其半島問題に就いて論ずるもの又一日にあらざる也、而して今や朝鮮王國は此朝鮮通の子が手によつて吾人に紹介せらる其滔々たる商賈著書と其撰を異にせる固より其所たるべし一篇地理部社會部歷史部近世史に分ち秩序整然一讀能く其事情を知らしむ蓋し王國大體の事を知るに於て適好の書となす可し、志士一本を坐右に備へて可なり

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

德富猪一郎編

經世小策

上下各定價廿錢　郵稅四錢

發行所　東京日吉町　民友社

比律賓群島

定價拾八錢　郵稅四錢

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

四版

海舟伯題字　弘松宣枝著

阪本龍馬

定價十五錢　郵稅四錢

◎讀賣評　坂本龍馬は海南奇傑の士也至誠國を憂ひ慷慨世を思ふ卄年にして漂然國を出で東奔西走遂に薩長聯合の大策を成就し以て維新革命の先導者たる名譽を完うす其生涯僅かに卅四年に滿たずと雖も而かも波瀾極めて多く人生悲喜の極を嘗む今や弘松宣枝氏明快奔放の筆を以て此偉人を寫す坂本龍馬の面目紙上に躍如たり書中往々評論に失するものあるは著者が熱心の至す所ならん歟志士仁人青年學生共に一讀して可也

雨谷一榮庵著（十一月中旬發賣）

藤田東湖

彼は世に何事をなせしか――彼の生涯は雷霆風雨――彼が性行は嚴霜烈日――彼が奇氣――彼が偉闘――精細なる資料と剴切なる文字とを以つて描き出さる――血たり――涙たり――赤賊犯す可らざるものあるを見る。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

新刊發賣廣告

三版　今世人物評傳叢書第一册

山縣有朋

附　渡邊國武　岡本柳之介

○定價十五錢　○郵稅四錢

再版　今世人物評傳叢書第二册

大隈重信

附　矢野文雄　大石正巳

○定價十三錢　○郵稅四錢

新刊豫告

近世人物評傳叢書第三册（十一月上旬發賣）

伊藤博文

附末松謙澄、伊東巳代治

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

民友社新刊發賣廣告

世界偉人傳 第壹冊

ダーウヰン

（肖像及挿畫八葉）定價十五錢 郵稅四錢

目に曰く（一）小出生（第二）ビーグル號の航海（第三）倫敦の生涯（第四）ダーウヰンの閲歷（第五）人物（第六）進化論 讀むべし遺憾なし

社會叢書 第六卷

學問の應用

定價十錢 郵稅二錢

章を分つ五、（第一）學問（第二）學問の種類（第三）學問の撰擇（第四）學問の方法（第五）學問の應用…說き來つて懇切次第平易なりと云ふ

少年叢書 少年傳記 第四冊

子ルソン

定價十二錢 郵稅二錢

東洋の英國を以つて任ずる我海國の年少氣鋭なる諸子の爲めに少年傳記叢書第四冊として子ルソンは紹介せられたり

家庭叢書號外

[illegible]

蘆亭主人著（十一月七日發賣）

定價金十五錢〇郵稅金二錢

王朝女流文學者の泰斗紫式部は茲に艶麗豐富の健筆によつて紹介せられんとす――彼は如何に戀愛……如何に悲哀……を味ひしか 全章を分ちて九となす……

目錄要領

（一）經歷＝系統◎（二）式部の性行◎（三）源語著作の時代◎（四）式部が愛に對する理想◎（五）源語の組織◎（六）源語に於ける「人」◎（七）散文家としての式部◎（八）王朝文學と式部◎（九）源氏物語梗概

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

少年傳記叢書號外

三鷹子著　（十一月中旬發賣）

大村益次郎

靖國神社の馬場先に兀として立てる巨人の像あり——こはこれ誰が像なるか——微々たる一介の醫生より出で遂に廟堂に入りて重きをなせし維新の大勳兵部大村益次郎紀念の像なり生きては昇進彼が如く死しては斯る榮をとゞむ六尺の男子玆に到りて能事畢るといふべきなり四十七年の生涯風を起し雲を捲く大活劇又少年立志の好龜鑑に非ずや。

中野欲東著　（十一月下旬發賣）

王安石

論評の精細文章の輕快——荊公が面目描き出されて餘蘊なし——公は古人の傳へし如き忠に似たる大奸なりしか——或は著者が辯ずる如く大奸に似たる忠なりしか——判斷は一に讀者にあり。

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

第一國民小說	定價十五錢	郵稅四錢
第二國民小說	定價十五錢	郵稅六錢
第三國民小說	定價十五錢	郵稅四錢
第四國民小說	定價十五錢	郵稅四錢
第五國民小說	定價二十錢	郵稅四錢
第六國民小說	定價十五錢	郵稅四錢
第七國民小說	定價十五錢	郵稅四錢
第八國民小說	定價十五錢	郵稅四錢

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價——一冊金五錢　郵稅金五厘
　　——半年（十二冊）前金五十錢　地方郵稅共金五十六錢
　　——一年（廿四冊）同金一圓　地方共金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

號七十番
發行兼印刷人　吉崎四吉
編輯人　金子佐平
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿九年十一月十日發行
家庭雜誌第八拾九號

目錄

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第八拾九號
（明治廿九年十一月十日發兌）

社説

家庭敎育の敎具

家庭敎育は、學校敎育の如くに一定の課業を有するにあらざるを以て、從て一定の敎具を有せざると共に、日常百般の事悉く其課業にあらざるなく、亦日常百般の事物皆其敎具にあらざるはなし。

然れども此くの如き廣き意味に於ての敎具は暫く之を舍き、直接の敎具となるべきもの亦なきにあらざる也而して其第一を翫具とす。

翫具は其種類により、最も幼時より十五六歳の頃までも採用せらるゝものありて、これより收得すべき智識經驗等一にして足らざれば、翫具の改良は實に家庭敎育の改良に大なる影響を及ぼすべきものゝ一也。

實に其初でん〳〵太鼓振り鼓の耳の敎養より、各種の色彩による眼の敎養より、次第に複雜に進みて、動植物の摸造、樂器、はては理化學を應用したるものに及ぶ。其感化影響の大なる意想外に出るものなるを以て、從て之が撰擇に多くの注意を要せざるべからず。

頃年は翫具にも幾多の改良ありて文明の利器を摸造し理化學を應用したるもの、亦少なからざれば、よく之を撰擇し、翫弄の際機に觸れ折りを見合せ、漸次に其理由を說示せば、兒女をして其翫具に對する興味を增さしむるのみならず、科學思想の缺乏を感ずる日本家庭に新文明の恩光を導くの端ともなるべく、國民の科學思想を高むる源ともなるべし。

特に水力應用の器械を始め、一二の玻璃管硝子罎封蠟の酒精燈の類あらば、容易く之を製作し得べきもの多きを以て、餘閑兒女を相手に之を製造し、從て造り從

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て其理由を語らば其利益一にして足らざらんとす。要するに翫具の撰擇兒女の年齡智識の程度に應じ、成るべく其種類を擴張して遂に新奇より新奇に入るべきと同時に、粗製の翫具には色彩の剝脫するもの、或は鉛器其口唇に觸れて有害なるもの少なからざれば、此等の注意も肝要也。

次に家庭敎育の敎具として必要なるは繪畫也。今古の名人偉人賢婦才女の肖像を始め、山水風物の寫眞畫、都邑城市名勝古跡の圖畫等、啻に見て其眼を喜ばし、其識を弘むるのみならず、之が繪解は實に地理敎育の基礎也。歷史敎育の基礎也。立志の始也。博覽弘聞の端緒也。

一葉のワシントンの肖像あらば、以て北米建國史を授け得べきにあらずや、一葉の三尖塔圖あらば、ナイル河畔の古文明をも語るべく、隊商の沙漠旅行をも語るべきにあらずや。

是の故に家庭敎育の敎官たるべき主婦は、多少繪畫の技能を有すること極めて必要なるのみならず、たとへ自ら繪畫の技能を有せざるにもせよ、家庭には多くの繪畫を有すること家庭敎育上缺ぐべからざる事也。厚き洋紙等を綴りて畫帖を作り、雜誌の挿繪などにて美しきものを貼り置く如きは最もよし。

其他家庭の裝飾等も此の心掛けを以てせば、其感化少なからざるべく、皆良好の敎具を兼ねしむるを得べし。

夫婦

夫婦ほど世にしたしきものはなし、然るにその別の字を以て不易の法と定むるはいかにぞや、それ夫婦は人倫の大綱にして、父子君臣もみなこれよりおこる事なり、其間したしみむつまじきが中にも、なれけがるゝ樣にあらず候を別とは云、黃門公に別と云義を伺ひ候とき仰せに、婚禮の後、朝おき出しとき何さなくつゝましくはぢかはしき心底有之候、この心根を始終失ひ不申候が別なりと仰せられ候由、古今の名敎なりと知るべし、凡そなれ過ぐるにより自然と心安さにふし／＼起りて、夫婦

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の同雲獻の如きに至るなり、家禮にもいへる如く、婦は必ず我より目下の方より迎ふべしさいへり、しかるに今は我よりも高貴の家の女を娶り、あまつさへ財寶をこひ、土木の直をこふ、こゝによりてその婦もかならず驕戻にして常にほこる意あり、夫はこれを屈せんさ思ひ、婦はこれにほこらんさ思ひ候、その上驕れ過るに至りては、妬心をおこし、大に家内治まらざるに至るべし、夫の附の女、婦の附の女、たがひに遠き思ひなく、主人を大切に思ひてせりあふほどに、自然さ上の夫婦の心も化して中あしきに至るなり、愼むべし、女はすべて文盲なるをよしさす、女の才あるは大に害をなす、決して學問などはいらぬものにて、かな本よむほどならばそれにて事足るべし、武藝は尚更さすべからず、女はたゞ内にくど／＼して日をくらすもの故、馬鹿なるが女の智なるなり、さて古より英雄豪傑の士女にたぶらかされ、又は制せらるるもの多し、隋の大祖の如きも獨孤後に制せられき、それをいかにさ尋ぬるに、女は至柔のもの故、かへつて至剛のものを制するなり、男もつれに女をば大に侮りて、いかでかれに制せられんさ思ひて油斷するに、女は外に勤めなく專一に夫の心をみすかして、氣に入る樣にさのみ思ふ故に、工拙是ほどの差になるなり、その上愛する心よりその專制のきざしさ見えず、よし見ゐても甚だかすかなり、制するにたらず、われ敵國の計にのらず、剛強の士を手につく、何んぞ愚痴の女われをたぶらかさんさ思ふに依て、その心驕るにつき、つひ日々さ覺えず彼が術中に陷り、深谷の底にいたりて始ておどろけども、よぢのぼるてだてなし、易にいふ霜をふむの漸をしらぬなり、右の故に晉の獻公隋の文帝の如きも女にたぶらかされて家國を亂しゝぞかし、愼むべし、女はいかにも柔弱にして和順なるをよしさす、且又政事向又は諸願等奥より出で候樣に成ては甚だあしく候、たいてい理なる事にても政事等にかゝる事に候て、奥向より出し事ならばさり上け申すまじく候、妾の親族を家臣さなす事これ禁止すべし、萬一始よりある親族ならば、散職を與へて政事にあづからしむべからず、其の人物よしさいへども用ふべからず候事云々

（松平樂翁）

科學

石油の話（下）

天水生

石油は化學的成分は何でしやう？

石油は一言で申せば炭素と水素との化合物で御座いま

す、精しく申せば一個の化合躰ではなく多くの炭素と水素との化合躰（炭化水素）の混合物でムいます、其中で炭素の少い化合躰の方が速に揮發します、即ち揮發油の如きは炭素の少い化合躰の集つたもので、重油は最も炭素の數の多い化合躰の集つたるものでムいます石蠟の如きは重油の中でも最も炭素の多きものでムいます、燈油は炭素の數より云へば中間に位する化合躰の混合物でムいます、序に申上ますが、我國で用ふる石油は大抵露西亞か亞米利加の石油でムいますが、露油の方が米油より價いが安い、大抵一箱に付て三四十錢方も安價でムいます、夫れと云ふは露油は「ランプ」に燈用して米油より其光が暗いからです、之れは何故かと云ふに露油の中に含で居る炭素の數は米油の中にあるより割合に多いから、從て燃へ難く故にかく暗い譯でムいます。

石炭は古代の植物が地中に埋れて上から強い壓力を受けて出來たといふことですが、石油はどうして出來たものでしやう？

石油成生の原因に就きましては種々學者の間に議論がムいまして、未た一定しませんが要するに次の二説に外ならんやうです、即ち一説は地球の表面より水が地中に滲み入り地に高熱の所で素炭に出遇ひ、化學作用を起して水の中の水素と其所に在る炭素と化合して炭化水素化合躰を生じ、此れが石油となると云ふ説でムいます、も一つの説は古代の動物又は植物が地下に埋められ時を經るに從つて上より増〻強き壓力を受け從て熱度を増して終に自然に有機質が分離蒸餾せられて石油が出來たものであると申ます、此説を主張する學者は實際に動植物質のものを蒸餾して石油に類する油を製したと云ふ事です、又此外に此説を證明する事實が澤山ありまして、今では此説を信ずる人の方が多いやうです。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

石油の引火點とは何のことでしやう?
引火點とは一定量の石油を熱して生ずる所の蒸氣に火をつけて燃へつき始める時其油の持て居る温度を申すものでありまして、此石油の引火點は二十五度なりと申しますれば、其石油を熱して其温度が攝氏の二十五度に達した時其蒸氣に火をつくれば燃へ始めると云ふ意味でムいます、此引火點を定めるには別に器械がムいますが夫れは略しましやう此引火點は各國皆法律を以て定めて、其規定したる引火點以下の石油は燈用として發賣することを禁じます、何故かく引火點の事を八釜敷云ふかと申しますれば、餘り引火點の低きものを用いますれば火がつき易くて餘程危險であるからです我國でも石油取締規則と申すものがありまして、其引火點を攝氏三十度(華氏八十六度)と定め、其れより以下の引火點を持て居る石油は醫療製藥調劑及ひ理化學工藝に於て費用する外は之を用ゆるを許しません。

外國では餘程古くから石油燈を使用して居たでしやうか?
石油の事は餘程古い歴史に見へて居ります、二千年程前の名高い歴史家ヘロデタスは既に石油の井戸の事を書て居ります、其他古代より歐羅巴、亞細亞の所々に出で、醫藥に用ゐた事もあると見へます、然し多量に産出するやうになりましたのは近代の事と見へまして米國でも盛に出るやうになりましたのは百年以來の事でムいます、然らば一般に歐米諸國で石油燈を使用するやうになりましたのは近代のことであろうと考へます。
日本でも石油燈を一般に用ゐるやうになりましたのは維新以後の事でムいますが、石油は余程昔から出たものと見へまして、日本書紀に天智天皇七年越ノ國献ニ燃土、燃水ーと書いてムいます、燃水とは即ち石油の事で燃土とは石油の謬み込みたる土の事でムいます、此土

を乾せば能く燃へます、又和訓栞と云ふ書には「くさうづ、臭水の義、本草にいふ石腦油也、越後國より燃土燃水を献る事、天智紀に見えたり、今も此國の名物となれり、其出す所のくさうづの油は、村上の城外黒川村に方十間餘の地有て、其わたり三丈餘、深さ五丈ばかりもあり、油水上に浮めり、かぐまといふ草につけとりて器に貯ふといふ、大荒戸村、礒明村、水梨村、柄尾村など、皆此油あり、土地を三尺ほど堀て出す、薪に代ふるには日乾す、柿崎寺泊の邊皆しかりといへり美濃國谷汲山、讃岐香川郡安原村にもあり、又類なり、信濃國水内郡藥山の産も同じ、上野國吾妻郡草津に温泉場あり、此草津も、臭水の義也といへり、蠻藥に土の油あり、また類也」と云ふ事が見へます、然らば越後國には餘程昔から石油が出たものと見へます、又貝原益軒の著はした大和本草と云ふ書には「山油甚臭、越後處處有レ之、賤民酌レ之用爲二燈油一、又信濃越前佐渡出レ之、阿蘭陀國所レ輸土油、是同種也、外科醫用レ之」と云ふ事が書て厶います、此によれば阿蘭陀から石油を輸入して外科の藥に用いましたと見へます。

世界中で一年間に凡そ何れくらいの石油が產出するもので厶いましやう?

最近の統計は調べて居りませんが、七八年若しくは十七八年前の統計によりますれば原油の產出高は大凡次表のやうで厶います。

	明治十一年	明治十八年	明治廿二年
北米合衆國	一三、四六六、四〇三石	一九、二四三、八三八石	二四、〇九一、八〇三石
露西亞	二、二一一、七四六	一一、六三七、六九〇	一八、三五七、二八五
墺地利(オーストリヤ)、匈牙利(ハンガリー)	一六六、〇三四	四四〇、五〇〇	五三八、六〇〇
留麻尼亞(ルーマニヤ)	一七六、二〇〇	二〇八、三五〇	四六六、九三〇
加奈陀(カナダ)	二七四、八七二	三三〇、三四〇	三三〇、三五〇
獨逸	一一、三九一	三六、四一二	四四、九三二
伊太利、印度、支那	二三六、三〇三	三一三、〇四〇	二六四、三五〇
合計	一六、五四二、九四九	三二、一八八、〇六九	四四、一八四、一三八

即ち明治廿二年には全世界の石油(原油)產額は四千四百十八萬四千百三十八石で厶いましたが、其後漸々增

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

加しまして廿七年には大凡七千四百二十九萬五千石に達したと申す事です、此中で米國と露國が最も多量に産出致す事は右の表を御覧になっても知れますが、世界各國は多くは此兩國から石油の供給をあをいで居ります、試みに各國にて消費する米露兩油の割合を調べますれば左の通りでムいます。

	米油（割合）	露油（割合）
獨逸、白耳義及和蘭	九〇	一〇
墺地利、匈牙利	—	一〇〇
土耳古	一	九九
伊太利	六二	三八
西班牙、葡萄牙	一〇〇	—
佛蘭西	七七	二三
英吉利	六九	三一
印度	三八	六二
支那	七一	二九
日本	七五	二五
平均	五八	四二

此表によれば日本では米油を消費する量は七割五分にて、露油は二割五分即ち米油の四分の一に當ります。

我國にて消費する石油は多分は米油か露油かですが、其輸入額は大抵毎年如何程でしやう？

我國の石油消費高は毎年増して參りますから、輸入の高も從て年々増加致します、次の表を御覧になれば明治元年からの輸入増加の模樣が知れます。

	石	元價（圓）
明治元年	七九八	七、二三六
明治五年	一一、一五二	一六〇、六〇八
明治十年	六七、〇五六	六〇五、五九八
明治二十年	五二六、四七二	一、八七一、四二八
明治二十五年	八一七、二三二	三、三二八、三九八
明治二十六年	一、二一九、〇八七	四、四〇一、〇四〇
明治二十七年	一、三九一、〇九三	五、一三五、三二二

我國内にて産出する石油の高は如何程でしやう？

一昨年の調べによれば原油一年の産額は十三萬八千石餘でムいます、今次に十數年前よりの原油の産額を國別にして示しましやう。

	明治十三年（石）	同十七年（石）	同十八年（石）	同廿五年（石）	同廿六年（石）	同廿七年（石）
越後	二三、六〇七	三六、九二四	二四、四八二	六六、〇四二	八〇、二五九	一三四、八六六
遠江	三、八七五	三、七八四	三、六三〇	二、八三三	二、五〇七	二、五四八
羽後	二三八	七七一	八〇五	三四〇	一一八	三四五

信濃	二六三石	四八一石	四三五石	六三六石	四〇三石	二四八石
石狩		三三	一四八	五三	七八	一〇五
膽振					二八〇	
上野						五
合計	二六、九七三	二九、五四一	三〇、九三二	七二、八九三	八三、六四三	一三八、〇七七

かく毎年其産額は増加して參りますなれど、輸入額に比べますれば極めて僅かなものでムいます、明治廿七年の産出原油十三萬八千石の中よりかりに五萬石の石油燈油か出來るとしまするも、同年の輸入額百三十九萬石に比べますれば僅かに二十分の一にも足りません然らば我國にて消費する石油の九割五分以上は外國の輸入品にて、之が爲め我國民は年々五百萬圓以上の巨額を外國に仕拂ふ譯でムいます。

二三年來越後地方の石油の産額は著しく增加して參りました、又臺灣にも石油の産出ありと聞きますれば、今後益々石油事業を擴張し新式の器械を用ゐて之を採掘し精製して其産額を增して、漸次に外油の輸入を防ぐやうに致したいものでムいます。

鰯

紫式部の夫左衞門佐宣孝一日外出す、紫式部留守に鰯を食ふ、宣孝かへり、これを見てこは無下にいやしきものを好ませ給ふものかなといふをきゝて紫式部少しく顔あからめてさな笑ひ給ひそさて

日の本にはやらせ給ふいはしみづ　（岩清水）
まゐらぬ人は（參詣といふに食ふ事をかく）あらじとぞ思ふ

これより女中だちの鰯の事を、おむら又は紫さもいふなるべし、即ち鰯を紫式部の名によびかへたるなり、必ずさりとてはいはれねど又考ふべし。

實談

女王クリスチナ　其村子

破璃を以て鏡となせば宜しく衣紋の崩れを見るべく、人を以て鏡となせば、處世の秘決を知るに足る、衣紋

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の崩れを見るか故に姿勢を正すことを得べく、處世の秘决を知るが故に行路更に誤つことなし。史傳を讀むの必用は全く是がためにして、成敗を見て鑑みすとは實に是を意味するなり。若しも斯る要意なくんばたとひ幾何の史傳、一々讀破し盡くすとも、果して何の功かある、一篇の空文積日の徒勞、更に得るところもなくて終らん。



玆に説き出す、勇敢男にも優るスエーデンの女王クリスチナ其人の如き尤も鑑みるに足ると信す。成程温厚を以て立つ我家庭雜誌の讀者諸姉には、眉顰めたまふもあるべし。されども玻璃の鏡其よきをのみ寫さるゝことを知らば、斯る人の傳も亦讀んで損なきことを知らん。况んや其女らしからざる事の想しきかたにあらざるをや、故に臆せず、撓まずして、我れはこれを玆に語る。

クリスチナはスエーデンの王ガスタバソアヅルフと皇后エリヂノラと間に出來し長女にして、一千六百二十六年十二月八日に生る。一生の行路遂に墓に行きし日まで、决して衰へざりし勇敢の氣は、實にその天禀の資性にして東西別かぬ頃ほひより、すでに其緒を顯はしたり。

漸く三歳に達せし春、父なるガスタバスにつれられてカルモルの町に行きし事あり、市知事は此幼なき王女を驚かしめんことを恐れて、歡迎の祝砲をひかへたりしに、『いやとよ、此子はかつてより斯ることに驚かず何の何の氣つかひなし、疾々發砲なすべし』と、王口づから仰せらるゝに、さらばとて頓て轟々車前に發砲せり。いかにも仰せられしが如く、王女は驚きたまふ色なく、其終り果たる時『もつとよ〳〵』と、いたくむつ

がりたまひしと、紀傳家のつたふる逸事これを證して餘りあり。

其頃宗教の改革てふ大事起りて、歐洲の全土いづくもこれがために騒き、或は彼に結び、又は是れに合して同黨異伐慘を極めぬ。されば又父なるガスタバス王も夙とに新教派の方に組みし、ルッセンの戰場に於て倒れたまへり、これ實に王女七歳の時とぞ聞く。

思はざる父ガスタバスの最期によりて、王女は大ひなる保護を失ひ、僅かに母君の手に任かされたり。然るに此母君といふは生れ得て健康ならず、心ばへも亦躰につれて弱々しかりければ、王女の養育は一に其腰元どもの手に任かされたり。

末は一國の王位を繼ぎたまふべき王女の養育、なか〳〵輕き任にあらず、心盡くしにも心を盡し、これを指導しまいらすといへども、父君の統をついて勇敢人に勝れし王女は、彼等の女々しき事を忌み、一々退け玉ひしとぞ。

漸々物心覺へてよりは、一心學びの道に凝りて晝夜怠りたまふことなく、十四歳の時には希臘拉典の文をさへ、自由に解したまふに至れり、然して其尤も心醉して殆んど手を放し玉はざりし、最愛嗜好の書といふは、ホーマー及び英雄傳なりき。

今は早成年の域に達せりとて、一千六百四十四年即ち王女十八歳の春三月、位を繼ひで、クリスチナ女王と萬衆のためにかしづかれ、自から萬機を取りたまへり天禀の氣はこゝにも顯はれ、國家のために痛めたまふ胸の殆んど安き時なく、孜々として怠りたまはざりしこと、實にや歐洲各國の君主の中に於ても、有數屈指のうちなりき。されど妙齢花の如く色美しき其容を飾りたまふ事とては、他國の使臣に逢ひたまふか或は特別の式にてもあるにあらずは、決して〳〵あることなく、常は尤も質素なる粧ほひにて、其帽子の如きは實

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に男もの〻キャップに過ぎず、叉髪のかざりとては僅かに一片のりボンのみ、毎朝唯に十五分これにて其日の粧ひを全く終りたまひしと聞けば其他は推して知るべきなり。

人或は難じていふ、女子は誠に人生の花なり、天美と麗とを彼れに賦與す、そを飾り粧ふは實に女子の務めにして、叉天の道を盡すといふべし。况んや位九五の高きにある女王にして、如何なればとて斯るぞや、こは餘りとやいふべき其行ひ、如何に世の爲めに苦心すとも、粧ほふ間などなくてやあるべき、嗚呼女性としては餘り粗暴なり、あまり野なりと。

非難一應の理なきにあらず、されども、試みに思へ、時は如何なる時にして女王如何なる境にあるかを。父王新たに倒れたまひて國いまだ安らかならず、宗敎改革の擧いまだ靜まらずして何時如何なる事のあるやも知れざる時に當つて、如何でか悠々たり得べきぞ、主幼、然かも女なり、然して依然其國威を至難の時に保ちしは一にも二にも年若き女王の斯かりしことによる、實に鑑みるべきなり、年少の夫女、鏡臺の前の美術家どもこれを讀んで如何の感ある。

いよ〳〵榮へて隣國其境を伺はず、クリスチナ女王の名は歐洲北方の强となるにらけてもいよ〳〵ます〳〵國事に務めたまふの極は、遂ひに壓制の邪路に陷り、一にも二にも我意を振舞ひ、殆んど臣下の諫をもいれ玉はざるに至りしは、賢くても夫女子の淺はか、男子に讓る所以なり、果ては人望頓みに落ち、相續の君チヤールスガスタパス王子までをも忌みたまふに至れば、遂に王位を去りて各國を遊歷し、歸國後は安全平和なる餘生を閑居に送りたまへり。

實に女王は結果、女子普通の弱點に落ちたまへり、されども是がため其功勞は滅すべからず。

女王も亦遂に一個の大々女傑たるにはぢず。

ミカエル、アンゲロ

俳諧堂



彫刻師として、畫工として、香ばしき名を世界の歷史にとゞめたる、伊太利の巨人ミカエルアンゲロといふは祖先以來系圖正しき貴族の子にして一千四百七十四年三月六日、タスカニー洲なるキヤプレスといふ地に於て生れたり。

殼裏の鳳雛は蚤夙とに知るく、後來成功の端にまだ總角の頃より顯はる。さるを渠が父はいたくもこれを喜ばず、如何ともして其希望を他に轉ぜしめんと欲し、すかしつおどしつ唯其事につとめ、果ては大ひに其頑なるを怒り、汝愚鈍の兒よ、何とて斯くも愚なるぞや彫刻繪畫の如きによつて名をなさんなど〻欲するは賤しき職人ふぜいとなりて、さしも世の人々に知られ來りし我家の名を汚がさんとするや、さる心得違ひのもの我に於て一も用なし、疾く出で行けと口きたなく罵り耻かしむるに至りたり、されども其天然の嗜好は更に撓ることなかりけり。

如何にしてもそを思ひ止まらしめんと考へたる渠が父、は遂に一計を案じ出せり、即ち其頃伊國に行はれし占星の術を學ばしむる事にして、毎夜屋上の小塔に出てよく〳〵其星行を觀察して緻密なる表を作るべしぞと命じたり、これ僅かに十三の齡を重ねし小童には頗る困難なる仕事にして、又甚だ多忙なる務めなり、其多

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

忙なる處こそ父の渠に命ぜし所以にして即ち幼きミカエルに壽の事彫刻の事を思ふ暇あらざらしめんが爲なりき。

然るに此事の更に功なく、却て其度を增せしこそいとも〳〵可咲しけれ、四面寂として人なきの頃、獨り小塔の上に出でゝ仰ぎ見る大空、雲なくして水の如く、氷輪我れのみを照らして明かなるの時、又月なくして一望暗膽、無數の恒星光り螢々として金剛石を欲めたるに似たる處、大ひに渠か心を動かし、星行を觀察すべき渠か眼は其美のために奪ひさられ、表を作るべく與へられたる紙と筆とは、盡く其景を寫すの用に盡されたり。

嗚呼斯くの如く亨け得たる天性の嗜好は、難に逢ふて撓ます屈せず、父こそ却てそを折檻するの法にあぐめり、恰もよし此時にダビッドガールランジャといへる美術家ありて、ミカエルこそ實に後世可畏の少童にして、天性の伎倆誠に想像の外に秀でたり、渠か手になれる一葉の油畵惡魔に打れたるセントアントニーの圖の如きは意匠といひ運筆といひ、萬づ宜しきを得て一つの非なく、誠に美術の好標本、我等却て遠く及はず斯る兒をして他の業につかしめんと欲する父の心こそ如何にしても解すべからずとて、自からミカエルか家に至り父に逢ふて懇ゝ事の理を語り、且つ又繪工とても彫刻師とても思ひたまふ如き賤しきものにあらずとて、言を盡して說きしかば積年の迷ひ忽ち解け、兒をして欲する處をなさしめんことを諾し、よきに薰陶あれかしと賴むまでに至りたり。

籠中の仙鶴、今や蒼空に放たれたり、冲天九萬里の高きに至る、渠か心のまゝなるべし。

父の許を得たる渠れは、是よりガールランジャについて怠らず、切磋琢磨いよ〳〵ます〳〵勸めたり、獨得の伎倆時と共に顯はれ日と共に進むも渠は以て足れり

とせず、夜ごと〳〵フロレンス町なるカルミンの寺院に行き、人もなき處に座して神來其筆に加はりて、伎倆の更にすゝまんことを祈れり。古來一道に名ある人、其初めに於て其上達を神に祈り、佛に念し、或はそれが爲に寒垢離夏書など樣々の難行をなせしもの東西共に其例多く、唯此ミカエルのみにあらず他より是を見る時はいづれも一旦の迷信にして漸々笑ふ可きの跡なきにあらず、偶像の前に祈り、或は幣帛の前に念ず、元より何の功なき理なり、されども叉退



いて考一考せば決して然らず、一心凝つて更に他なく神に祈つても必ず此事を遂げんと期し、佛に念じても須らく誤またざらんことを求む、此時氣に毛頭の弛みなく、全身單にこれにむかふて更に一の邪念なし、所謂精神一致何のならざる所かあらん、さればば祈る神の助けにあらず、賴む佛の守りにあらず、上達といふは一にも二にも、其神に祈り佛に念ず精神眞心の致す所、余ミカエルの傳を讀んで此處に到り、かれの如く高きに達せし其成功、全く此事によれりぞと、信じて更に疑はず、一笑に附すべき

事にはあらず。

此熱心を以てす、平凡の人と雖も猶ほ進歩す、况んや天性ミカエルの如きに於て如何で進歩の見へざるべき同輩の凡てを凌いで進む、彼が伎倆は大ひに一同の嫉妬をひけり、就中トレヂヤノーといへる一人は殊に深く彼をそねみ、萬つにつけて逆らへり、或日の事なりとか、彼れはミカエルに打むかひ『君は如何にして畫くぞ』と問ひしに、ミカエルは莞爾一番、『然り、先づ豪慢と神を信ぜざるの念とを退け、然して後に畫くなり』と何心なく答へたりしに、日頃豪慢にして且つ神を信ぜざるトレヂヤノーは、己れが事を罵るなりと大ひに怒り、『何をいふか』といひながら拳を握りて力を込め、餘念なきミカエルが面を擊てり、其時に受けし創は其學校時代に於て、彼れが終生の嫉をひくまで其伎倆に於て秀でたりしことの紀念として、永く存じ、彼が一生を經て、遂に其墓にまでも伴なへり。然して其トレヂヤノーは此事により、堅き校則に照されḍ、遂に退校を命ぜらるゝに至りたり。

彫刻の術も亦繪畫と共に、つれて進み、いたくも世人の注意をひけり、諸方よりの囑托日を追ふて多くなりまさり行く内にも、富豪のきこへ高きロレンゾーデメヂシーといへる人の市民の爲に新開なせし廣き公園に備へ附くべき古聖賢さては英雄豪傑の肖像を初めとして其他各種の彫刻物は、誰か其任に當る者ぞと、苟くも其術に於て得たる處のあるものは名譽のため、其撰にかゝらんことを偏へに希望し、門外の人々は又、如何に立派なるものゝ出來べきやと、まだ其人も定まらぬにこれを豫想し、全市唯此事をのみうはさして、待ちに待ちし其大任は、ミカエルが身に歸したりけり、嘆賞するもの、嫉妬するもの、又今更に喧し。

數年の永きにわたりて、此大任を終たる後に彼れは初めてフロレンスを去り、各所に遊歴し、到る處繪畫に

或は彫刻に彼か獨特の腕をふるふて、ともに其名をとゞめて行けり。

其名はます／＼高く響き、世界の各國いづくまでも、伊國にミカエルアンゲロのありてふ事を知らざるはなきに至れり。

述べ去り、述べ來りたるが如く、彼れはまだうら若き竹馬幼年の昔より、一千五百六十三年、八十九といふ高齢を以て眠りし時に至るまで實に一片の餘念なく、唯ゝ繪畫と彫刻の二つに全身を捧げ、遂に其位階も富も忘れたりき、これぞ誠に其種類の何たるに論なく、凡て伎藝に志す者に、殘せし彼れが教訓なり。

羅馬の寺院に今猶は存せる、モセスの肖像(彫刻)とイエス裁判の繪畫とは歐洲各國の美術家が彼を問はず、これに論なく、美術の靈寶として尊ぶ處、千歲のもとこれによりて、余がミカエルは生けるなり。

候べく候

昔は行なり次第にして置けといふ事を候べく候にやつておけといふ者多かりしか近年は稀になり適といふも其の緣故は知らざる多し寶曆頃の一口ばなしに候べく候べく候と人にすぐれて多くかく女ありあまりに筆まかせに書きたる候べく候の人に讀み得まじと思ひ其の側に候べく候を又書て再度思ふは二ツ書きしと若しあやしむ事もやと又傍に此の候べく候は書そこなひの候べく候にて御座候べく候が本の候べく候に御座候べく候と書たりさぞ此話をもて昔候べく候を多く書たるを思ふべし。

文藝

折にふれて

蕙香女史

大かた世のありさまを見るに、ゆゝしき事のみいと多かめり、財寶あまたありてゆたかにさきくさの三つ葉よつはに殿つくりして、よのうきふしも知らで時にあひしたりかほに、馬のひづめの音高く大路もところせ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まげに、車きしらせつゝあなたこなたありく人こそ、さらすともと見ゆれ、あるはいやしからぬ人も、とある家にあやしのものつどへて、櫻よ紅葉よと、四季をり〳〵の花ををりみたして、夜ふくるまでおのれまつ勝んと、たがひにあらそふもあめり、あるはかしこの出湯、こゝのなりところなど、おのかしゝ心にまかせ遊びありくもあり、若きも老たるも、志ざしえんとて司たりき人の家に行きかよひて位山にのぼり、某の職などもとめんとて諂ふもあらん、學ばんとすれど財なく、こゝろさしはたさて一向におのが幸なき身をかこつかたもありなん、財あれど學ぶを好まず、あはれ年若き人の日毎にえひしれて。人心地もなければおのづからあしきものにしも惑はされ、わが身をなやますも多からん、いとわびしきや、あるはよの人の心はまと少なく、あら〳〵しく、たのもしと思ひし人も、飛鳥川の淵瀬とかはり行く、實に賴まれぬよのたゝすまひよとかこちつゝ、塵ふかき都にすみわびて、かた田舍に籠り、久かたの雲井はるかに照る月を。おのが心の鏡とし、優曇華の花さく時をおのづからまつらん人もなきにしもあらず、また、女子の文よむわざはいふも更なり、何くれと學びえてそれ〳〵の道もあきらかになれば。物知りかほに鼻のもとおごめかし、おみな男子のわかちなく、ともすればいひあらそひなどして、われのみ賢しと思へるさまのほにあらはるゝも、いとにくさけなり、今の世に優にやさしきふるまひあるはあしきと思ふにやあらん、髮は結へど額より頸すぢのあたりに亂れかゝり、白き物を用ゆる事なく、肩いからせつゝ何いそぐらん、足も空にまとひてあはたゞしげにゆくが大路にあまた見ゆめり、これもある文のはやしにかよふ少女なるらん、かゝる人のあればにや、老たる人のいふやう、女子には明治の御代のすゝみたる敎へをうけなんよりは、たゞ家にありて、衣のた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ち縫ひを旨とし、かたはら昔よりつたはれる女大學などいへる文をこそ、あきらめ行かんかたなか〳〵に心安けれ、とそ、さいはるゝもとはりなれど、いかゞあらん物いへば詞いやしくていときゝにくし、あるは世の中の事も人の上も、よきにつけあしきにつけて、心えたるよしとてまとしやかに、かたれど、つや〳〵知らぬもあめり、實におそろしき人とやいふべからん、また學びの庭に入りたゝぬ女子もおしなべて、衣のあらそひ髮のゆひさま、さなくはいやしき人の物語に耽けり、あたら月日を物見にのみすごして、こよなき幸とこそ思へるもあまたあめれ、貧しき家さなくともみめかたちすくれし女子もてるは、雪霜をも凌がん松の操もなく、物のとはりも知らでさそふ水あらばなどねんじつゝ、糸竹にこの世をわたるはかなきものゝ數に入りこゝさて、心ゆきぬとうちよろこぶもあめるをか、人の心のうたてく覺ゆあるは、女子の世の仇波に舟さし出し中らにて、荒らき風に楫はをれ、思ふかたへも行きやらず、徒らにためらふもあらん、くさ〳〵思ひめぐらさば、いと口惜しくも哀しくもある哉すべて、呉竹のうきふし志けからぬ時とはいへ、世のうき瀬をわたり志さす島杯に行かんと船を浮べて、漕に楫取るべきはをさ〳〵あらじかし、まいて、としげき世にうまれ出し人はなか〳〵よろづにつけてくるしき事のみ多かめり、とまれかくまれ、人のさまを見ておのれを愼しむには志かじ、實に憂めかるてふ海士のすむ浦あらば、かごとばかりもゆきても見ましなとよしなき事を筆にまかせてこと〳〵しくかきつらねんも、われからいとあさましく覺ゆれば、餘はかいやりすてつ。

泪の瀧

桐硒舎女史

をろかなる泪ぞ袖に玉はなす
　われはせきあへず瀧津瀬なれば

と昔の人が詠まれしも今は我身にふりかゝる心地して胸も砕けむばかり、嗚呼いかにせん桐の一葉のちるを見てもそゞろに物のかなしきに、我最愛の姪闘澄八重子は七才を此世のわかれとして、暮行秋の露と消えぬ此兒生れつるときより人は知らず我眼には花と見えしかば、匂ひ出なむ春を樂しみて八重子と名づけ、二親にまさりて愛慈しみしかや〳〵物心づきてよりは行末の事のみ思ひて何事も我儘をゆるさず、假初の遊びにも物の草紙、あるは紙筆などあたへしにおのづから、讀書の業を甚好て伊勢物語を明暮なとしつゝ「あたひ今に伯母ちゃんのあとゝりになるそして、伯母ちゃんは御茶が御好だからあたいも御茶がすきよ御歌もよむわ」といひしは何のためぞ今我を泣せむとてか、又千住より伯父柳夢の來る毎に膝にまつはりて「あたいのすきな伯父ちゃんに好物をおあげ、あたへも千住へ行と伯父ちゃん伯母ちゃんに御馳走になるよ」などあまへしも泪の種此兒「又はめるやうなれど」不思議に長者を敬ひ慕ひ父梭齋が某省へ出勤するを必らず送り出ては、祖父ちゃんの御機嫌に行といふが毎朝の例なれば、我も此心をいよ〳〵賴母敷思ひしにいかなるまがつみぞ、夏の始より食物ほしき病にかゝりておもやせしかば、二親をはため心を盡して神に祈佛にたのみ、多くの醫師の治療もこひたれど露ばかりの甲斐もなく、紅葉そむる頃よりは伏勝なれといぬる日の歌會にも出むとて泣に、とゞめ兼て例の如く我かたへに居せしが歌の聞治なりき、又此頃になりては身動もならぬに手習せんとてやまず、醫のいましめも親のいましめもきかぬはおぼつかなくも、紙筆をあたへしにおのか好める食

物書ならべて母に見せッ、「母ぁちやん今は何もたべないからきいきが余快たら伯母ちやんや兄ちやんやで、御料理店へ行て澤山たべるよ其時はマァも御供につれてよ（弟の事）そして御手習の時も皆さんのやうに御辨當拵ひて頂戴よ、わすれずに屹度ですよ、其かはり母ちやんが赤を産とわたいが働きますよ」と千松の約束を聞母の心はいかなりけむ今も其書置は佛間にあり、去廿七日死出の門出の一句は父ちやんに飴をあげてよ……あとはよへとてたへず笑を含て安く眠れり我もともに消いる思ひにて

　足乳根の母の手はなれ今宵より
　　たれと添寐の夢結ぶらむ

昨日迄もけふ迄も我文書にも歌よむにも、うなゐるよめのわらはよとかつぎ出したるは此兒今宵後誰れにかせむと、世の人々の笑ひ給はん事もかへりみずをろかなる悔言をかいしるゝは、迷ひの雲を晴さんとてなむあはれとみゆるしたまへとねきッ、袖に泪の瀧なすのみ

瀧の水（三）

春波

淺茅生と咏ずべき廢苑を左にながめ、御所の壁に沿ふて北に上ぼり、今出川御門を出たる衝當りに、大きな古き寺がある、臨濟宗の總本山相國寺といふて、足利三代將軍の建立と案内の小僧が縁起むづかしく説きたつる、佛殿庫裡方丈山門經藏浴室と列らぶ七堂伽藍のいづれも、古色蒼然として、鬱蒼たる老松と、倚々たる緑竹との中にかこまれ、おのづからなる清淨の境、誠に神澄む景色である。

折しも秋の日の暮果てゝ、本尊の前の燈明、光かすかに三日月糸の如く風やゝ寒き時、塔の段の方より身には木綿の居士衣、古びたる帽子をかぶり、朴木齒小倉

の緒の足駄、あゆみ靜かに聲低く、寒山の詩を吟じながら出で來たのは小島源太郎である、般若林を横ぎりて方丈の後ろ、豐光寺の門をくゞりて內玄關より上り唯今と其處に居し二三人の小僧どもに挨拶して、淨月居と額したる四疊半の部屋に通り、マッチを探してランプをともし、机の上に置いて何やら佛書らしきを讀んで居たが、ふと横むいて置床の達磨大師、何時も變らぬむづかしき顏に破顏一笑、正當すそもさんの時如何すと、いひながらコロリ横になりて六七冊の書物を重ねて枕となし、四つに折て敷てあつた赤ケットゥを寐ながらひろげてこれにくるまり、ホット吐息ついて暫くはランプを見詰めて居たりしが、やがて寐反へて光りを脊にし、又吐息ついて今度は仰むき、兩方の掌を組んで目を蔽ほひ、思ひ沈んだる樣子、心は如何なる處に通ふや。

小島さん〳〵、君の處へこれが來たよと、いひながら入り來たる小僧の出す手紙請取りて上書を見れば莫逆の友、內海芳太郎の手蹟なるに喜しくも封切りて讀む一々、至急相談の趣きありて唯今東京より到着せり、必ず〳〵猶豫なく、此使と共に來いとの事なるに居士衣を羽織とぬぎかへ、其他身形を正くして、奧に居ます老僧に一〻此事を語り、事によれば更けて今夜はとまるやも知れずとて其許を得て玄關に立出で、表に待ち居しむかひの車に乘りてエイ〳〵のかけ聲高く、間もなく楫棒を卸したのは三條小橋の西詰に萬屋の甚兵衛とて內海芳太郎が定宿である。

出迎ふた小女に案內されて中二階の座敷に通れば、內海莞笑やかに出迎ふて一應久濶の挨拶手短かにすんで頓て指向ひの小酒盛、指しつ押へつ、打とけて飮む酒のまわり早く、至急といふた相談の何一つ語り出づる處もなく、其夜は其儘其處に、轉んで殆んど前後も知らず、翌る日の入時半やがて九時にも近き頃、やう

〳〵起出で丶高瀬川の水に顔を洗ひ、又指むかふて昨夜の如くに指しつ押へつ。

盃の間々に内海此度の相談至急といふは外でもない、毎度々々すゝめた通りの事ではあるが、それについてと序を置いて思ひかけずもさきつ頃根岸にて金岡の母親、落ぶれ果てゝ納豆賣とまでなれるにめぐり逢ふて、悉しく聞いたる一ゝの來歴を語り、何は兎も角もお峯さんこと操をまもりていまだ縁にもつかずとは、喜ばしといへども又何となくいぶかしく、自から大音寺前へ二三度四五度も行つて見たる躰態、決して〳〵虚言はない、實に〳〵見あげた事の次第、早速芝へ行いて母堂様に話した所、これも亦非常に哀れに思ほし召され、親なる人は兎も角も萬事やさしかりしお峯こと、それと聞いては捨て置かれず、片時も早く呼びかへしたしとは思ふものゝ、何をいふにも源太郎こと一旦の思ひ切りに家は弟に讓りたれば他に別家にてもさすの外なし、それにて金岡の母御承知して娘をかへし呉れば事の頂上、第一には源太郎何といふやも知れずさしあたりては此事から御骨折、毎度ながら頼みいるとの事に取るものも取りあへず、實は斯うして來た譯なれば、何時もの通りに情張らず、一つは母御の御心一つは又お峯さんの心をも思ひやつて、抹香臭い事は今日を限り、是非々々歸りたまへよと、詞をつくして說きに說いた。

源太郎は全く事の不意である、殆んど心頭を去らぬお峯が自分の爲に操を守りて縁にもつかず居るとは全く事の不意である、百般の目的はづれ果ては娘を賣つて食はんず考への金岡勘次郎がお峯を其儘にして置いたとは全く事の不意である、事の不意であるだけに疑も加はりて誠とは急に思はれぬものゝ、喜びは實に禁じ難きものもある、然し何となく氣が氣でない樣な所もあつて歸らふとは中々いはぬ、今にしてそんな馬鹿々

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

々しい事がと遂にこれを否んで仕舞ふた。
如何にいふも必らずと母親に約束した內海是非々々連れてかへらんと說きに說いたが承知する氣色がないからすご／＼と唯一人にて立かへつた。
其後二十日ばかりして、今度は母親と內海、二人づれにてむかひに來たり、管長なる老僧までが詞を添へて源太郎漸々得心して東京にかへり、早速金岡へわたりをつけ日ならず話まとまりて、岩にせかれし瀧の水茲に再び一つになつた。（完）

鼠の穴

鼠は家の賊にして身其家に寓して而も食物什器を害ふ、上に法律嚴重なるも倘ほ戸を鑽るの盜賊痕を絕はず、家屋に如何に嚴重の戒嚴を爲すも大鼠梁上に跋扈し慊らず戸を鑽り壁を穿ちて出入に便にし、其穴には栗のイがをつめ置くが一番妙策なり

談叢

勇しき孝子

松ヶ枝女史譯

（一）ギリシヤ人の家庭

殆んど六七十年昔のことギリシヤの近海でカンデアといふ島の南岸穩やかな小山の上に輕く蘿蔓を纏ふた誠に美くしい一棟の家がありました、四面小丘に圍繞せられてありますが一方の側には綠を湛ゆる湖水あり北方には山脈が長く横はりてその最高の峯は恰も諸山の王といふ風采で群峯に拔んでゝ高くその雪冠を擡げて居りますこの家の主と申はメサロスといふギリシヤ人で妻のヘレナとこの物語りの起る時漸く片手に一つ加へる年のフエレプと申男の子とがその家族でありました、

家の圍りには美はしき花園、佛手柑、橙の杜、橄欖、葡萄の圃それに又心地よき泉などがありましたもメサロスは猶その他煙草と綿との耕地を有しました、彼は自分の收益の大部をばカンデア島の貧困なる住民を救濟する爲めに使用して居りました當時カンデアの住民は著るしくトルコ政府の虐待を受て殆んど奴隷の境遇に陷落せられその汗して儲けた家產すら非道にも掠奪せらるゝ事などあります故メサロスの眼は屢々報怨の涙に曇り手は幾度か腰間の秋水に觸れました然かし顧みて妻と兒童といふ觀念にむら立つ氣焰も幾度か抑壓せられて居りました、

逆待の復讐など企つるギリシヤ人は忽ちトルコ人の牙に罹つて家產も自身も悉皆メチヤ〳〵にせられ父は牢獄にうち込まれ母は奴隷に賣買せられ稚き兒童は罪もなきに頭を挫かるゝといふが當時の無慘な常例でこの災ひにかゝらぬものは實に至て僅少でしたがメサロスは價ひ貴き贈物をもて權勢盛なトルコ知事の保護を買ひましたので暫らくは無難な月日を暮らしました、又さま〳〵受くる侮辱も忍び忍んで居りました、

然かし遂にこの怖ろしきトルコ政府の軛より免かれ得るの折と見えた時期が到來しました、

干戈に訴ふるの叫びはギリシヤ全土に鳴り響きましたからカンデアにある勇しきキリスト教徒の住民等も等しくこの一般の背叛に與みし己が自由と信仰との爲めに戰はんと用意しましたメサロスは一隊の勇兵を率ひて出陣しましたが數週經ても何の音信もありません妻のヘンナは唯だその夫の安全を祈るとを唯一の慰藉として居りました、

一日太陽西に入ろふとする頃フエレブは廊下で遊んで居りましたが母はその傍に坐つて遙か潮水の方をながめつ悲しい默想に沈んで居ました、父親の勇悍な氣性は已に稚き童子の胸にも傳えられてありますからフエ

レブは何時しか木や銅錫の片を集めてギリシヤとトルコの兵卒にかたどり小さな銃をその間に撃つ眞似などして獨りで勇んで居りました、

母さん見ておくれ、此處を、ギリシヤの方が勝つたんだよそうして敵の頸を剣ねて遣つたんだ、父さんもこんなになさるだろふねへ、ねへ母さん」と嬉しそうな眼付きで申ました、母は寂びしい微笑を洩らしつ「をゝ、どうか神様のお扶けで勝つようにしたいものだ暫らくお音りがないしそれに先頃のお音りは餘りよくはなかつたから……人數があまり不釣合だもの、」

「そんな事なあにかまふもんか、神は正しい方に勝利を恵むのだと母さんは何時も敎ひて下さつたじやありませんか、いまにトルコ人は皆追ひ拂はれてしまふでしやうそうすればあのアライも來なくなるし僕の一番よい遊び道具や小さな馬など取り上げる人もなくなつてようムいましやう、」

「何處のアライ?」と母は尋ねました、

「知事の息子のアライ、ラドシヤクです」とはフイレブの答でした、

「母さん知ッてらつしやるでしやう、そら、いつか三四年前に知事と一所にアライが來た時にあの悪戯子が僕の物をみんな取つたじやありませんかそれあ取つたってもし僕の小さな馬だけ殘して行つたならよかつたんだけれど、だが僕あ大人に成つたら剣持つて戰さに行つて僕の物を皆取り返して來るんだ、あゝそうしよう、」

「馬鹿な事お云ひだよ」と母はその子の光澤ある黒き髪毛を撫ながら申ました「お前が成人になつた頃にあお前の小さな馬はとうに死んでしまふて居るでしやうそれにお前もあの馬の事あそんなに思はなくなつて居るかも知れません、それよりか父さんがもし勝つてお歸りならもつと奇麗な立派なのを持つてお出でしやう」

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

「どうぞ白いのならよいなあ」と手を拍つて叫びました
「僕あいつでも白いのを欲しいと思ふて居つたから、知事が白い馬に乗つて居るからそうすれあ僕だつてまけずに威張つて遣るわ、」
「そうねへ、」と遙かの山を見つめて居つた母は答ひました、
「だが一寸お聞きよ何か山の方で音がするやうだが？」
「母さんそうだよ、聞える！鐵砲だ！戰さだよ、」
「恐ろしい、そんなに近く、」彼の女の美くしい顔色は俄かに蒼ざめて參りました「フエレブやもし向ふで戰つて居るのがお前の父さんなら……だがそうじやあるまい」
「なぜ、そうじやないつて母さん？もし僕の父さんならきつと勇しく戰つてお出だろふ、」
「それあそうだけれど、もし敵がこんなに近く來たのならもう何もかも最後だろふ、――あゝ神よ扶け給へ――まあお前跪きなさい、」
「僕あ寧ろ父さんと一所に戰ひたいなあ！母さんお聞きなさい發砲して居るよ」
「まあ靜かになさいよ、私共が間違ふて居るのかも知れんたゞ嵐なのかも知れません、」
稚きフエレブは頭を掉つて廊下から歩み出でゝ熱心に遙かの山を見つめながら意を留めて聞えて居りましたが叫び出しました「母さん、雷じやないよ、あら烟りが上つて居る御覽なさい母さん」
「そうだ、望遠鏡を取つておくれ、早くよ、烟りか霧かよく分るだろふ」
彼等は望遠鏡もてよく見ましたが最早や何の疑もないギリシヤとトルコの人民は激戰を始めたので山谷絶壁悉く軍勢もて蓋はれて居る、ヘレナはその人々の誰なるやすら判じる事が出來ました、から直ちに跪いて
「神よギリシヤを惠み給へ又わが夫をも守らせ給へ」と

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

叫びましたフエレブも母の傍に跪いて兩手を合せて祈りました、

日沒と共に砲發の音は止みましたが猶折々幽かな鐵砲の音が二度三度聞えました、夜は漸々と犯し來つて野も山も暫し暗黑の中に葬られましたが新月細く大空にあらわるゝと共に微薄な光明を全地に與えました

「もう終ひたのだ、」と自分の腕でその慈母の頸を抱きしめながらフエレブは申出しました「母さん氣遣はずに居らつしやい、トルコの方が敗北たんで父さんが追ひ擊ちして居らつしやるに違ひない」

「どうぞそうあつてくれわよいが、然し私にあそう思はれんがねい、まあ然しどんな事が起ろふと忍んで神のみ旨に從はねばならないがたゞどうかお前だけは無難で過ごすやうに祈りたい」と云ひつゝ母の聲は啜泣に曇りましてその最愛の子をしかと自分の胸に抱きよせて一所に坐つて居りました、然し早や長く待つの要はありませなんだ決局の危期それは哀れな母が案じたよりも數倍無慘な浮き目をもたらし來るの危期が逼つて參りました、

（二）驚愕

日沒の頃ギリシヤの一小隊は山の谷道を辿つて「アラー」（「アラー」とはアラビヤ語で上帝といふ事です）の名を叫びつゝ追ひ來るトルコの兵を防いで居りましたが發砲の稍々過んだ時ギリシヤの隊長は部下に申ました、「敵は退き始めた戰場では負けたが自由と生命は吾人のものだ欺計に陷入つて死傷も多いが詮方ない、他の處じや自由の爲めに叫んで居る同胞もある彼處に行きなされモレアに行きなされ今安全に散じましやう今別れねばなりませんがモレアで又逢ひましやう、」

「勇將メサロス我々をお見捨てあるな」と小隊は隊長の身を取り卷いて恩愛の眞心もて申ました「我々は貴君に忠實を盡しましやう、別るゝよりは寧ろ共に討死に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

さして下され」

「否々兄弟よ、卿等は早くこゝを立ち退いてもつと成功の見込のある場所で戰はねばなりません、私の勸告をお聞きなされ私は行つて妻と子とを救ふて直きに卿等に追ひ付きましやう、トルコの軛を脱する爲めにあ一人でも勇しい兵が必要です、私の勸告にお從ひなさい、」

小隊は隊長の手を握つて悲痛の念を抑へながら別れて森の中に散じました、メサロスは鐵砲にもたれつ彼等の影の見えずなるまで眺めて居りましたが苦々しく微笑して「あゝ已に遲いかンデァを救ふ事が出來ぬ、私は妻子を扶けて逃げねばならぬ、」と獨言いたしました鐵砲を肩にかけて家路に向つて進まふと志ましたが始めて自分の力の非常に弱つた事を悟りました、彼が蒼ざめた顏色は硝烟の爲めに煤けて居るし眉間の傷からは鮮血流れてその美はしい衣服を穢ごして居ります山道は彼が常に慣れて居る處ですから月光の案内も要しませなんだ四面至て靜肅でたゞ木の葉〳〵のがさつく音と谷川の流るゝ音との外何の響も聞えません

「眠つて居るのだな、」とメサロスは申ました、「戰ひに疲れたのだろふ、丁度よい、海岸の洞穴は安全な隱れ場だそのうち直きに舟でモシアに渡ると志やう、ひと時も失つちやならぬ」

彼が家に達した時ははや已に夜半でありました强て力を出して戶をたゝきまして「ヘレナ戶を開けてくれ危期が逼つて居る……逃げねばならぬよ」と申しました處が內には微かな叫びが聞えて戶は忽ち開かれヘレナは夫の腕によりすがりました「傷負ひなさいましたなあ」と驚て叫びました、

「そうだ、乃公は傷負ふて非常に疲れて居る、我が軍が敗北した……トルコ兵が追擊に來るだろふから急いで仕度なさい大事なものを集めて早くフェレアを起しな

さい一秒も失なつちやいけん危期が逼つて居るのだから」

ヘレナは實に喪神するほど驚きましたが漸く悲みを抑へて逃ぐる仕度を致しました

「何でも任せの儘に致しませう然かしあなた、少しお休みなすつて何か召しあがらねや……いま「パン」と葡萄酒とを持つて參りませう」とは妻の言葉でムいました、

「否、逃げねばならぬ、もし乃公の氣力が盡きたならお前は子供を伴れて逃げなさい私の身はたゞ天の御意に任かするのだ、海岸の洞穴は安全だから彼處に行ッて隱れなさいそうすれや直きに舟の要意が出來てモレアに安全に渡されるから、早く急ぎなさい」とメサロス申ましたが妻は「あなたを置いて去る事は出來ません悲みにも悦びにも私の位置はあなたのお側にあるのですから」と答て動きません、

メサロスは何の答も致しませんで、廊下の睡床の上に氣絶しました、ヘレナは悲しそうな眼付きて夫の顔を一寸見顔にかゝる髮の毛をかき拂ッて額に接吻し「どうぞ神の冥助のあるやうに」と吐息つきながら飲食物と傷の爲めの綳帶とを取るに急ぎました、熱心なる介抱の甲斐があつてメサロスは蘇生しましたがすると立ち上つてきよろ／＼あたりを見廻はして「まあだこゝに居つたか、飛んで逃げろヘレナ、今は乃公も行くによい、子供を伴れて早く」と微かな聲で申ました

ヘレナは急ぎ二階に上つてフエレブを搖り起して事のあらましを聞かせましたヘレナが寶石など大切なものを集めて居る間にフエレブは下にかけ降りて父親の兩腕にすがり付きましたヘレナが下りて來るや否メサロスは再び早く逃げ去れと命じました自分は二三歩進むと直に仆れましたから又聲を勵まして「飛んで逃げろ乃公はおれの運命に任かせてお前達の安全な事さへ知

れあ滿足して死ぬから早く行け」と申ました妻は何の答も致しません直ちに自分の腕をさしのべて良人の躰を支え殆ど運んで行くやうにして「よつく私にもたれかゝつてお出なさい私は强うムいますし洞穴は遠くはムいませんそれともしそこへ行き着くことが出來なんだら共々に死にましやう、」と申まするとフエレブは又「父さん僕あトルコの兵隊に殺されたッて父さんの側は離れあせん」と勇みました、斯くして三人庭の近くまで參りまするとにはかに門の方で吶喊の音が起りました

妻子を伴れて居るメサロスは恐怖の念にしばし身動きも致しませなんだ、庭の門は忽ち排し破られてトルコの一小隊が恐ろしくも侵入して參りました、

メロサスの心は殆ど張り裂くる計りです「もう遲い！を〻神よ母と兒童を憐み給へヘレナや早く深林の中に隱れておまへ、夜は暗い暫時は人に分らんだろふ、フエレブやお前は行つて母さんのお世話をして上げろ」

「いや〳〵、僕は一步だつて父さんの側あ離れあしない」と子は答ひました、ヘレナは憐れな良人の五躰を支えてフエレブと共にトルコの兵に見付からぬやうに用心しながら一番近い深林の中に運んで行きました

トルコの兵は怖ろしく叫び立てながら家の内に亂入してよいものは取り去り持ち歸られぬものをば皆火を付けて燒き捨てました、

焔は炎々と屋根から燃え上つて四面の山谷眞晝の如くに照らされまする無慘やな不幸にもメサロス親子は遂にトルコの兵に見出されました兵隊は三人を引き摺り歸つて彼等の運命の裁決を申渡しました即ち裁決とは「カチアの市場に於て奴隷として賣らるべき事」でムいました、

(未完)

一夜旅行

紫嬌

おい君ッ、君ッてエば、おい。ヤァ君ッ、何か用かい。ウン用なんかないんだけど、君ッ、君ゃァ泥を堀て何をするんだ。何でも好さ。敎へ玉ひな、敎へたッて好じゃァないか。ヨウ敎へ玉いよゥ。敎へよゥか、僕ァね、今日君も聞てたらう先生が地球は丸くッて日本の裏は亞米利加だッて、チッ左樣云てたらう。ウン〳〵。ダカラチ僕ァ何だ、斯樣やッて澤山泥を堀と穴が開から、亞米利加迄穴ァ開て飛込むんだ、左樣すると面白いぜ、屹度直に亞米利加へ行ものゥ。君ッ夫ゃァ駄目だ、夫ゃァ不良ないやァ。何故デモチ、亞米利加にやァ。獅子だの虎だのが澤山居るから、……若し何だァ、山中へでも明いて、ヒョイと飛出た時、あぐりと喰られると大變だものゥ。大丈夫だよ、虎ゃチ獅子がチ、あぐッとやらうとすればチ、又ヒョイト飛込さ、左樣すりゃァ大丈夫だァね。左樣かなァ、左樣だ〳〵、ダケレド何だァ穴なんざァ堀なくッたッて行らァ。夫あ行るさ、汽車に乘たり船に乘たりすりゃァ誰だッて行るさ。ウ、ン僕ァ最早少ト好智慧を出たァ、ダケレド何だァ君なんかにァ敎へて遣ないや。宜とも君なんかに敎はらなくッたつて困らないや、僕ァ何だ精々と堀ァ。ヂャァ勝手に堀て玉ひ、僕獨で行から何處へ。亞米利加さァ。

穴堀説主張者駄目奈琴太は反對者雲野仲吉に、亞米利加旅行の先陣をされまじと、汗みづくで穴堀事業に從事し。

イヤ此奴、手前も亞米利加か佛蘭西へ行のか、オッと左樣に潜らうとしても駄目だぞ、此奴斯樣尻尾を摑まいて、ウーン、ヤッ半分に切たな、此樣蚯蚓でさへ、洋行しやうとするのに何だ己は萬物の長たる人間樣だ(蚯蚓曰く此樣馬鹿でもか)雲野が何を爲るか、己程の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

智慧が如何して彼奴にあるものか、穴が明く、ボンと飛込む、亞米利加へ出て、お早う、今日は、へい、實に大變な發明を仕て仕舞たぞ、ヒヤア此奴屹驚させたぜ、シッ〳〵、蛙奴ピョコ〳〵飛逃かね、ハヽヽ、オヤッ、オヤ〳〵〳〵、是やア大變な者を堀出たぞ、金剛石か知ら、ハテナ、オヤ〳〵〳〵、梅干の種だ。

雲野仲吉は名前丈に駄目奈の計畫を冷笑一番ヘン馬鹿奴がと退けて、

フヽン、穴を堀る、亞米利加へ出るッ、ヘン人を馬鹿にするぜ、地震があれば、ガタ〳〵ゴトゴト、亞米利加へ出る迄にやア、身體中痣だらけになるは、夫にと、第一温泉が地面の中から湧て、火山も矢張り地面の中から吹出すッ、是だから危險だ、駄目奈奴、屹度大火傷を爲るぜ、止ば宜に、ダガ何様ッと、先刻彼様云れたから、『僕ア何だ好智慧を出した、僕獨で行から勝手に堀



り玉い、何處へ行く、亞米利加さア、』と口惜まぎれに

遂云たけれど、僕が行なけりやァ、彼奴乾度笑うぞ、
イァ悪く云ふぞ、サァ如何したら好らうなァ、穴を堀
る、亞米利加へ出る、お早う今日は左樣なら、此奴好い、
オット是やァ駄目奈の發明だッけ、ハテナ地球は丸く、
地球は轉る、轉る、ま……わ……る、〆たまわる、容
易だぞ己が斯樣高く空へ昇つて居ると、地球がグルリ、
明日は亞米利加の上になる、此奴こそ大發明だぞ、何
樣ものだい、へン僕あ如何して斯樣剛からう實に剛い
よ、オヤツ、オヤツ、オラヤオヤ、餘り剛くもないか
しらん、鳥じやァなし空へは到底昇られないぞ、ダケ
レド鳥なんか飛んだから人間なら猶昇る位出來る筈だ
ぞ、エート空を飛のは鳥計りかな、斯樣だからッ、エ
ート、オ、ヽ〳〵有る〳〵未ある、烟々、烟なら大
丈夫だ、烟と仕た所が己の身體を烟にする理にも行ず
此奴餘程至難ぞ、……むづか、ナァニ至難事がある物
か、身體の中へ烟を澤山吹込ば、ホラ一寸生た風船が
出來る理屈だ、是に限る是だ〳〵。
と早速家へ歸ると、阿母殿が釜の下を焚きつけ置きし
を見て。
何でも甘い具合に出來た物だ、マヅ斯樣此處へ來て、
斯樣吸さ、ウッブ、ゴホン、此奴苦しい、然し先生が
左樣云たぞ艱難汝を玉にす、大事業家は種々な苦を爲
る者だと、構ふもんか我慢して吸てやれ、スウ〳〵〳〵
ゴホン〳〵〳〵、アー苦い涙が出る、スウ〳〵〳〵、
ゴホン〳〵〳〵、スウ〳〵〳〵、ゴッホン〳〵〳〵、
ヤッ成程是は涙ではないぞ、玉だ〳〵〳〵、眼から玉
が出るのだ、艱難汝を玉にすッ、オヤ〳〵斯樣玉にな
られても困るて、鼻から涕洟の玉も出て來た、スウス
ウ〳〵のゴホン〳〵〳〵。
此奴到底我慢が出來ない、何か外に好趣向が、オヤッ
お父さんも鼻から大分烟を出して居るぞ、ハヽア失張
り亞米利加旅行かな、左樣だらう夫に違いはないよ、

此前僕がお星樣ァ何でせうッて聽たら、ウン彼か彼は彼さ、雨の降る穴のさとゝ云たが、實に學者だからね、オット滅多に賞られないぞ、旅行事業ではなく烟草をふかすのだな、ナアル、ナアルホド、彼だ烟草の烟さへ吸ば眼も鼻も玉にせずと濟む理だ、ドレ烟草に掛らうか。

ダが身體の輕くなつた所で、輕氣球を結び付れば猶好い筈だな、ヂア先に風船の買出だて、夫に限る〳〵。

早速何所かにて輕氣球數多買求め、五體一寸の隙間なく結び付、くゝし付、烟草四五ふくスウ〳〵〳〵、

『フワ〳〵、スウ〳〵〳〵、フワ〳〵〳〵、スウスウ〳〵』

ヒヤア、上つた、………上つた昇つた、實際昇つたに相違ないのだ、………屋根が見えるは、アッ實に汚い屋根だぞ、斯樣家に住つてる奴は如何奴だらうて、ハテナ彼處が時計屋で其隣家だから、アッ己の家だ、道理で此間雨が漏たぜ、スウ〳〵〳〵、スウ〳〵〳〵、と斯樣身體へ烟を入て、オヤ〳〵〳〵のオヤ〳〵だ未泥を堀てるのかな、穴計り見えて駄目奈が居ないぞ、アッ居る〳〵、穴が深くなつたので、中へ入つて堀て居るのだ、オイ、駄目奈君オイ此所だよ、ハヽア此奴ァ面白い、オイ駄目奈、駄目奈の馬鹿ヤイ。頓痴氣ち。

穴堀先生駄目奈君は、何處とも知れず聲が仕て、『頓痴氣ちいの頓痴氣ち、馬鹿々々々の馬鹿々々やァい』と聞えるので。

ハテナ何處か音樂らしく聞へるが、好く聞くと頓智氣の馬鹿野郎ッ、イヤ〳〵〳〵何でも音樂だて、己樣が斯樣やつて穴を堀てムるのを、螻蛄か何かゝ、唯今に大日本帝國の大學者駄目奈琴多樣イヤ君がだ、亞米利加へ參られますとか何とか地震の神樣か何かへ注進したのだ、左樣だ夫で歡迎の樂隊が來るのだ、精々と堀れ堀れ、ヤッシッシ〳〵。

空では仲吉。
ハヽア堀ぞ〳〵、へヽヽ、何程堀ても手前の性名て駄目奈琴多ハヽヽ、オヤ〳〵成程なア、先生は噓は吐ねイ、廻る〳〵グル〳〵廻るは、己も始て地球の廻るのを見たが成程グル〳〵〳〵、アハヽヽ、此奴餘程面白や。
是は地球が廻るに非ずして、餘りに煙草をふかしたるため、眼がまわるのと知り玉へ。
イヤア〳〵〳〵、斯樣休なしに廻られちやァ堪らねエ何ても少時間眼を閉ぐ事だ、斯樣閉いで居れば大丈夫な上に又樂だ、今にピョイと太平洋の上でもつて、下ア見ると鯨が潮を噴てるなんざあ悪くないぞ。
と此夜一晩怪き空想に驅れて、翌日未明に眼を開けば是は不思議なるかな、亞米利加にも非ず、佛蘭西にも亦あらず、『獨逸か、否、英國か、否々、支那ですか、なッか〳〵、何處です』矢張り日本で、日本も日本、雲野の家の上でした。
ハテナ何處だらう、彼處に斯樣時計臺があッて、イヤア奇妙々々、亞米利加に違いなし、オヤ彼處に穴が明てるやうだ、ハテナ駄目奈奴も首尾好くやつて來のかしらん、ヤア出て來た〳〵、オイ駄目奈君お互樣に斯樣やつて來て見ると、未朝だから人通がないが、必外人のみだからチ、是からは喧嘩廢止だ、好か口論禁止だよ、オイ〳〵、駄目奈君如何したのだ。
ハアテナ、雲野奴何を仕て居るのだらう、エッ何、何だつて、亞米利加へ來たから喧嘩は廢止だ、ウップハヽヽ、己計りちやァないぞ、彼奴も大發明家の仕損先生だアハヽヽ、オイ雲野此所は亞米利加ちやァないよ、日本だよ、日……本のチエ、東……京、君の宅の上だよ。
エ、僕の家、アッ左樣だ、駄目奈君殘念だねエ。
何が。何がつて地球が廻り過たを知ずに居たのだ。(終)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

群書解題

欲　東

伊勢物語

伊勢物語は在原業平朝臣のよみ歌に、誰とは知らず、詞書を添へて順序を正し、其おいたちの頃の歌（筒井つゝ井筒にかけしまろがたけ老にけらしな妹見ざる間に）より辭世（遂に行く道とはかねてきゝしかど昨日今日とは思はさりけり）に至るまで一篇の傳記ともいはゞいふべき樣に作りなしたる物にして、竹取物語の如き架空のものにはあらざるなり。

さて伊勢物語と名づけしには樣々の說ありて、或は書中伊勢の齋宮が事あるが故ともいひ、又は有名なる才女伊勢がつくりたる故とも傳ふ、いづれも共に皆非なり、即ち伊勢とは古き詞にて僻言といふ意なり、されば伊勢物語とは僻言とてわけもなきつまらぬ事を集めたる物語といふことなり。

表題はたとひ然かいふとも決してつまらぬ物語にはあらず、歌は元よりも六歌仙の一人なる業平朝臣の作なれば一つもおろかなるものなく、詞書は又短簡にして盡せること、實に〳〵たぐひなし、さればこそ定家卿が、歌よまん人は古今和歌集について必ず讀むべき書なりといひしは、誠に〳〵さることなり、たゞ歌よまん人のみならず、文つくらん人も亦必ず〳〵讀むべき書なり、かつや王朝時代の歴史にも大ひなるかゝわりありて、正史の欠を補ふべければ史を學ばん人も亦參考のために讀むべき書なり。

さて其作者なる業平朝臣とは如何なる人ぞ、阿保親王の第五子にしていふまでもなく皇族なり、さるを天長年中兄行平朝臣と共に下りて人臣の列に交はり在原の姓を拜領せり、貞觀中右馬頭に任じ、勅を奉

じて鴻臚館《今の外務省なり》に渤海國の使節を勞問せり、されば唯和學のみにあらで唐土の學にも秀でたりし事と知らる後右近衛の中將となる、よりて世人在五中將とこそはいへり、年五十六にじて歿す、後人加茂の岩本に祠をたてゝこれを祀る、棟梁、滋春とて二人の子いづれも和歌をよくし殊に滋春は大和物語の作のあるあり。

是其傳の大略なり、然して此中將程世にも誤まり傳へられたる人はあらじ、放縱にして行修まらず、唯々みだりがましき事にのみ耽りし樣にかきたるはいづれもいづれも虚說なり、實に藤原氏の專橫を怒りての事なりけり。

其あらかたを語らんに、文德天皇の時に當りて藤原良房といふ大臣あり、威權他に及ぶ者とてもなく、萬づ心のまゝに行なひ、第一の皇子惟喬親王を太子に定めたまはんとの御意を遮ぎりておのが娘の出なる第二の皇子惟仁親王を太子となせり、これ即ち清和天皇にして藤原氏の勢これよります〱盛んにして遂に暴逆を極むに至れり。

業平はいたくも是を憤ほり、《思ふことといはでぞ唯にやみぬべき我とひとしき人しなければ》との歌をよんで衆寡敵せず、正義埋沒を嘆じて身を崩せしなり、されば其放縱の行によりて藤原氏の威を妨げし事甚だ多し。

伊勢物語の註釋本は、伊勢物語拾穗抄及び伊勢物語新釋、伊勢物語古意など樣々あれども伊勢物語新釋尤もよろし。

悉く書を信せば書なきに如かず　（論語）

近著紹介

本欄には家庭の讀物さして有益なる近著を紹介す

海軍遊戲法　東京市神田區新石町二番地同文館發賣

本書は西圭一、野本衛佐美兩氏の著に係る尙武的遊戲

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

法の一として海軍遊戯法を講せしものなり、第一編海上戰鬪、第二編砲臺攻擊、第三編端艇競漕に分ち、人を以て軍艦に代へ勝敗を決する新遊戯法の思ひつきなか〱面白し、海國人たる日本人殊に戰勝後世界に大敵を控ゆる日本人、殊に將來に於て海戰を以て世界の覇王たるべき運命を有する日本人をして少年時代よりかゝる遊戯に慣れしむるは庶幾以て國家を益するに足らんか、定價三十錢

八咫烏　日本橋區本町三丁目博文館發行

最も少年の嗜好に適合せる才筆家巖谷漣山人「日本昔噺」を結了し、今又新に筆を起して「日本お伽噺」を創め第一編より第廿四編迄を豫告せり、此書は其第一篇にして八咫烏を骨子とし神武天皇が西國より起き給ひて長髓彥等の反賊を征伐し終に中州を平定し給ふまでの昔譚を面白く可愛氣なる筆法もて叙べたり、附錄に菊の紋を添えあるは御紋にちなみて取合よし、米仙畫とあれども頗る疑しきを惜むのみ、定價六錢

人の躰内に有する鐵分は極めて少なく殆んど百グレーン（一匁七分許）に過ぎす然れども鐵分のかくの如く僅少なるにも拘はらず人躰に取りて非常に必用なるものにしてその最少分を失ふも猶且大患を起さしむるさいふ

家政

鹽鮭の料理

最早新鹽の時節となりたるが、鹽鮭にても料理一つにては隨分旨く食し得られ、客膳へ供へても耻かしからぬものなり、左に經驗したるだけの料理法を記さん。

◉麴漬　身のよき所を細引つくり、麴を酒にてとき、切肉にしたる鮭を漬け置くこと一日間ばかり、出して麴のまゝ炙きて食膳に供す。

◉粕漬　これも鮭の料理中の珍味なり、酒粕の中へ鹽鮭の切肉を漬け置き、出して炙きて食す、二三日間

頃は最も味よし。

◉から漬　これは一種の平民的料理法にて、鹽鮭を適宜に切り、豆腐からの中へ漬け置く時は、能き鹽梅に鹽氣ぬけよき味となるなり。

◉蒸し炙　半日位水に浸し置きて鹽出をなし、鍋の中などにて鐵網を敷き其上に鮭を載せて蒸し、醬油をかけて食す。

◉炮烙炙　鹽引の鮭其まゝ大さいの目に切り、炮烙に入れ、酒ばかりにて煮出し、玉子を打ちわり、これにて閉ぢるなり。

◉吸物　一日間ぐらゐ水中にて鹽だしを爲し、吸物の肉とす、但し鱈同樣、鮭から幾分か鹽氣の出るものなれば、汁は其心にて仕立つべし、一種風味ある吸物なり。

◉鮭びしほ　鮭の肉のよき所を撰み庖刀の刄にてかきとり、成るべく上等の酒粕を混ぜてよく／＼たゝきまぜ、其色を梅びしほの如くして食す、ちよと變つて而白し。

肉類の中毒

動物の死するや、直ちに「プロマイン」と稱する有機物肉内に發生す、人躰に最も多く馬肉にも牛肉にもあり、魚類にては鰹最も多しとす、たとへば人躰を解剖する醫家が、偶々其指などに傷ある時は、直ちに其傷口より炎症を起し腫れ上るに至るは、「プロマイン」の害を起すの證なり。

此の「プロマイン」の害は傷口より侵入するのみならず胃中に入り血液に流動して、被害者の躰に異狀を呈し、爲めに死に至ることとなり。

素より能く燒き或は煮たる肉には、たとへ此毒あるも最早有機性無效となりて毒害を惹起すとなしと雖も、半煮の馬肉或は牛肉（近頃牛肉に馬肉を混じて賣るこ

と多ければ用心すべし)か生の鰹等を食する時は、忽ち此害を惹起すなり。

此害に遇ふ時は、發熱と共に身躰の各部に氣味悪く發疹し(殊に股、腋等は)面部、髪部に及び、眼球充血、耳鳴頭痛、甚しきは吐瀉し、終に死に至るものあり。然しながら輕き中毒ならば發疹するのみにて他に異狀なく、兩三日にして全癒すれども、吐瀉を起すものは輕々看過すべからず。

肉類の中毒なるを避けんには、第一新鮮なる肉を撰み、第二能く煮炙すべき肝要なり。

已に此毒に罹らば身躰を温暖にし、安臥して蒲團を被り發汗せしめ、充分に發疹せしむべし、必らず身躰を冷却すべからず、如何に發疹しても心配するに及ばす、直ちに退くものなり、併し動もすれば腸部に其害を及ぼすことあれば、醫師に就きて服藥せば後難なし。

これに就き可笑き一話あり、某家の細君、主人四五日間の留守中、晩食に鰹魚を食したるに果せるかな、中夜より發熱發疹前記の異狀を呈し、其翌朝身躰を見れば南瓜の皮の如く若しくば釜の肌の如く變し見るさへ胸悪るく、一見癩病の如く見えたれば、細君大に驚き醫師の診察を乞ふも耻しく、三日間に及び發疹愈々盛んとなりたれば、これは癩病ならんか、我家は癩病の遺傳なけれども、偶然に發することもありと聞きつれば、若しやそれではなきか、それならば生耻をさらさんより寧死するに如かず、と心を決し井戸側へ幾度か近寄りたれども、人にさまたげられて果さず、四日目の朝眼を覺せしに、昨夜まで恐しかりし皮膚一面拭ひしやうになり、今では此事笑話の種となりぬ、能々用心すべきことなり。

五　德

近頃になりていろ〳〵の五德世に顯はれたり、鑄鐵に

て火袋の一方に胴壺をつけて鐵瓶の代用となすもの一般の流行なりしが、これは鐵氣多きと、胴壺内のを掃除することの不便なると、全く鐵氣去る時は、壺側に腐朽を生して使用出來ざるに至る弊あるより、矢張従來の通り鐵橋を用ゆる家多けれど、火の長もちに不經濟あるを免かれず、此頃専賣といふ五德を見るに、胴壺の代りに釜となし、とりはづしに便にし（内面は瀬戸藥を塗れど無害）、火袋の方もとりはづしに便にし、鐵瓶をかくると、煮物燒物をなすに便にす、便利なると外見の美術的なるにや、此方を用ゆる家庭追々增加せり、代價は壹圓以上

家庭敎育と幼稚園の衝突

恕　哉

予は嘗て幼稚園の保姆に聞く所あり、曰く幼稚園にて專心敎養するも、家庭に於て之を破ると、予初め此言を聞いて解すること能はざりし、而して深く考ふれば、此言の甚た意味あるを發見せり、幼稚園の敎育と、家庭の養育とは、其軌を一にせざる可らざることは、何人も言ふ所なり、而して實際に於て之を實行するもの尠なきは甚た遺憾なり、假令ば幼稚園に於て、兒童に間食の有害なるを諭すと雖、家庭にては兒童の歸宅を待ち兼ねて、菓子、餅等を勸めて止まざるが如き、兒童に於ては其依る所に迷ひ、保姆の言、眞なるか、家庭の勸め、是なるか、兎に角道理より食ひ氣に附くは頑是なき兒童の天性なり、保姆が精神を凝め骨を折りて敎育せし事柄は、啻に此事のみに限らず、總ての事も、皆幼稚園を去りて一度び歸宅せし、僅か一時間程の少時間に於て之を毀はせるは蔽ふ可からざるの事實なり、これ吾人が常に家庭に向つて、深く注意を仰がざる可からざるの點なり、且つ此點に就きては、尙ほ他に關聯して注意すべきの事項あり、そは各家に於

て來客ある毎に、必ず茶菓を饗するの習慣あり、而して來客は其家の兒童に對して、愛想の爲めに直ちに其菓子等を與へ、無暗に勸めて之を食せしむるが如きは、世間ありがちの事なり、且つ又た家庭に於て堅く間食を禁ずるとするも、來客に於て之を破るとあるは歎ずべきなり、故に吾人は言はんとす、兒童敎育の事は只だに一己の家庭に止まらず、廣く社會公共の事業として、幼稚園と家庭間との連絡を通ずるのみに止まらず、進みて社會に向ふて大に此意を躰せられんとを望まざるを得ず。

内職案内

軍用襯衣及ヅボン下　此は陸軍省兵士被服部の御用製造品にして、ミシン縫の下縫をなす内職なり、先づ其の方法は生木綿、綿ネル等の襯衣及ヅボン下に裁ちたる布を以て、唯だ躾糸を掛くる如く極めて縫ひ置き、洋服裁縫店にて其れをミシン縫に掛け仕立て上りたる後、再び内職者の手にて鈕鉦を付け、それにて全く仕立て終るものにして頗る奇麗の内職たり、賃錢は襯衣とヅボン下と上下仕立てゝ二錢二厘位とすれども、此職に熟練したるものは一日十錢内外を得るといふ。

社交一斑

流行の栞

流行子

下〆と縮絆の半襟

帶の下〆に白縮緬を用ゆるこゝ已にすたれ果て、今日流行を極むるものは妙齡向にて桃色、鳩羽色、薩色の縮緬か、傘絞（傘のやうに絞りたるもの其色はいろ〳〵あり令閨向にもなるが寧ろ妙齡向に適す）の下〆なり。令閨向ならば銀鼠、淡鼠、壁鼠等

縮絆の半襟は妙齡向にて紫根、鳩羽、櫻鼠、銀鼠の縫模樣か、染出し大

模樣、模樣は紅葉、菊、牡丹最も多し、今圖南には藍鼠、淡利久、媚茶等の白糸縫模樣、模樣は光琳の桐、蔦、落梅、落松葉等最も多し（價四十錢より二圓まで）

指環

男物にてあらしか槌目か無地、印形も流行の內、形は大振、寶石入は無論はやらず。

女物には寶石を挿みたるあつさりしたるもの流行、（男子形を嵌めて其側に可愛き寶石入を嵌むることも流行）寶石は一個多けれど三個と七と三の勢ひ、「ダイヤモンド」のみもよし、中央に「ダイヤモンド」を置き、其兩側に「ルビー」（淡紅色）を添えたるものは配合よし、「サフワヤ」もよけれど、いづれも貴族的、「ガーネット」入は其以下の流行と知るべし。

雜録

支那の結婚式（上）

快哉生

今回は先度御約束を申上げた支那の結婚に就て少しく御話を致しましよう、支那では冠婚葬祭と申して、結婚は中々大切な儀式と致してあります、其の神聖なる儀式であるか否やは別問題として、些くも莫大なる費用の懸かる儀式であるとは疑ありません。

未婚の男女が先づ互に見初むる處は前回申上げた通り、神社佛閣の縁日です、此の日男の方にて彼の女なれば生涯我が半身として恥かしからぬと思ふか、或は男の兩親にて、彼の娘なれば倅の妻として適當であると思ふ女あれば、兩親等は百方手を盡して、其の娘の血統は勿論、其の家柄、性質、品行の探索に取り懸るのです、充分探索に探索を盡して、最早や大丈夫と思ふてから、扨て仲途人を頼み、正式に談判して愈々公然の申込を為した上で、結納を送れば、娘の方では承諾の驗に二羽の雁を返禮するの習慣があります、何故に雁を以て返禮するかと云へば、之れには頗る深長なる意味があるのです、元來雁と稱するものは奇妙な鳥で、何時も群を為して遊ぶにも拘はらず、一旦牡鳥が

死するに至れば、其の牝鳥は決して他の鳥と遊ばざるものなれば、吾々の娘も雁と等しく亭主を失ふとも必ず貞節を守りて、再婚するか如き不面目なる事を致さずとの意を示すに外なりません。

双方の結納終れば、婿の方では吉日に婚禮の式を擧げる豫意を致します、此の吉日凶日に就ては支那には又た奇妙なる習慣がありまして、暦を見れば、今日は吉日であるか凶日であるか直ぐに分かるのです、又た月にも吉凶がありて、普通舊暦三月と九月は吉月かと覺へて居ります、然れば結婚の無ひ日は一もなく、有る日は此處にも其處にも、矢鱈に澤山有るのです、御幣擔ぎも、此處らが大抵極點でしやう。

段々御目出度き日が近か寄ます、婿殿の方では宴會の準備に取懸ります、嫁樣の方では衣服器具其他の萬般の購入を始めます、支那の嫁入仕度と申しまするは、舊日本の嫁入仕度よりも、一層念が入りて居りまして、四季時節々々の衣服は勿論、夜具、髪道具、靴、傘に至る迄で、苟も女として必要のもの悉く携へなければならないので、此の仕度には隨分莫大の費用を惜まず、貴賤貧富の別なく、凡て身分不相應の品物を購ふの習慣で、私の北京滯在中に交際致しました、皇大后の宮付なる一屬吏の如き、年俸僅かに七拾テール（我が百〇五圓餘）に過ぎざる地位に在り乍ら、長女の結婚には現に四百テール（我が六百圓餘）を費しました、之れ畢竟支那人の守錢奴的根性に基するもので、持參荷物の些なき嫁は頗る肩が狹くて幅の利かない故でありましやう。

又た婿殿の方の準備と申まするは、種々ある内にも、先づ天盤と稱するものを作るとは最も必要なる準備中の一ッかと信じます、扨て天盤と稱しまするものは、果して何物かと申しまするに、高き柱を四方に立て、「アンペラ」を以て、天井と周圍を張りたる、日掩であ

ります、其の大さは中庭の大小に依りて種々の相違はありますれども、其の目的は畢竟、支那の室は狹くして、多人數の宴會に不便なれば、廣々したる宴席を設くるに外無りませんから、客の數に依りて適當の大さに作るのであります、結婚の當日は此の天盤内に數個の食卓を並べて、支那人御得意の鷄の丸煮、魚の天麩羅、豚汁、羊汁等、彼等の所謂酒地肉林を築くものと思召せば、大抵御想像が出來るでありましやう。

愈ゝ結婚式の當日となりましたれば、仲途人は申す迄も無く、曉朝より禮服を着用して、嫁樣の里へ參り、萬端の手合せを爲し居りまするど、婿殿の方よりは、御迎の使者が參ります、此の使者は勿論女性でありまして、普通婿殿と緣戚の關係を有して居るものを選ぶを例としてあります、迎の參りまするど、間も無く嫁入の行列は、繰出されます、此の行列に就ては暫らく讀者諸君の御清聽を汚さ無ければなりません。

所變れば品變はるとは、如何にも明言であります、私は支那の嫁入の行列を見る度毎に、馬鹿〳〵しいやら、面白いやら、何んとなく、奇妙な感覺を起さない事はありませんでした、先つ其の行列の長きとから申しますれば、如何なる下等社會の結婚の行列でも二十人乃至二十五人の行列の無いとはありません、此の行列と申しますものは、悉く乞食でありまして、市街は何處にも、葬具屋、婚具屋と申すか如きものあり、此の處に申込みますれば、幾人にても乞食を集めて、之れに黑色の著物を纒はしめ、大鼓、笛、笙、及ひ至極目出度い熟語など記したる制札の如きものを持たしめ早速注文したる處へ繰出して參ります、此處で一寸、申し加へて置かねばなりませんが、此の乞食行列は結婚の時でも、葬式の時でも進士及第の時でも、目出度き時でも、悲しき時でも、何時でも、御同樣の乞食行列です、只た異り居る處は制札の如きものゝ表を書き文字

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

が悲しき時には、悲しそうな句を用ひ、目出度き時には目出度そうな句を用ゆる丈けあります、扨て行列の順序は先づ制札を持ちたるもの幾人となく先きに進み、之れに續きて、笛の如き太鼓の如く、笙の如きもの吹き鳴らして進み行き、其の後に玉の輿が六人乃至八人にて舁かれて參ります、此の玉の輿は其の形狀殆ど我か國の神輿同樣で上下周圍皆に金銀珠玉を鏤めたるの感があります、此の内に所謂花嫁樣が鎮坐ましまして、四方の窓を閉し居れば、美人やら醜婦やら、若きやら、老人やらトンと、外からは見るとは出來ません、外から見るとの出來ぬは未だ宜しふ御座りますれども、此の輿の内に閉ち込められて、一里以上も、緩々乎り歩まるゝ、嫁樣は之れから夏などは苦しいでしよう、此の玉の輿の次ぎに、又た輿が二臺參ります、之れ左樣に立派ではありません、其の内には先方より迎に參りたる女と、嫁の里より附添ふて先方へ參る女が乘りて居ります、之に續き車が幾十輛此の内には親戚知己が其の行を盛にせん爲めに附添ふて參ります、其の後に荷物の行列がありて、所謂簞笥、長持、鏡臺、蒲團、机、傘、の種類を人夫に擔はして參ります、之れ先づ普通の行列です、恰かも、先驅既に新し橋に達するに後衛尙ほ二重橋に在るの有樣です扨て此の行列は先方へ參り終に如何なる儀式に列せるでしやう。



○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる**スコット乳菓**が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり◎此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に**虚弱なる婦人**は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萠芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる**スコット乳菓**は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を強くして活力を與ふること實に驚くべし◎◎◎此の乳菓の洪大なる滋養分が**嬰兒、小兒**及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雑誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝　境町	鳥居徳兵衛
仝　太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝　室町	資生堂
仝　本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝　道修町二丁目	武田長兵衛
仝　道修町三丁目	田邊五兵衛
仝　道修町二丁目	田畑利兵衛
仝　道修町二丁目	福田清右衛門
仝　道修町二丁目	鹽野儀三郎

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治廿五年九月十四日遞信省認可

社會小說出版豫告

看！看！看！

明治二十二三年の頃は我が文壇に新進作家の輩出尤も多かりし時期とす、後來の御家騷動、復讐談の陳套を壓倒して新たに作家が新見を開拓したるの時期なりとす、此の時に方て我社は努めて**新作家の創作を促がし既に其の名什巨觀と世に紹介したるもの尠からず、**亦以て明治文壇に一の功なしとせず、爾來星霜幾變、國運伸張して社會の現象益々多色、多端。是れが裏面の消息を傳ふるを以て任とするの小說作家たるもの又以て花鳥風月に安眠するの時に行らず、**念頭と實在の社會に置き、**月雪風流、宜なり曩日の奇矯作家も亦白粉紅膩、唯嬌、唯艷是れ喜ぶの文士も亦、**社會、人間、生活、時勢といへる題目に着眼**して以て數年鍊磨の筆硯を致さんとす、此際に當つて我社**『社會小說』出版の擧**あらんとし、明治文壇の新進作家、夙成家をして各々其の執る處の筆鋒を一所に集注せしめんとす、期する處は**文壇の革新にあり、**斯の如くしてよく名篇大作出で、明治文學界の生産をしてよく不朽に傳ふるを得ば、吾人の冀望亦空しからずといふべし、『社會小說』は毎月一回若しくは隔月一回左に列記する作家の脱稿を待つて順次に出版す（毎冊菊版二百頁內外）

第一（本年十二月下旬）齋藤綠雨
第二（三十年一月中旬）廣津柳浪
第三（同　三月上旬）幸田露伴
第四（同四月下旬）後藤宙外
第五　嵯峨のや主人
第六　尾崎紅葉
其他

發行所　東京々橋區日吉町四番地　民友社

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA